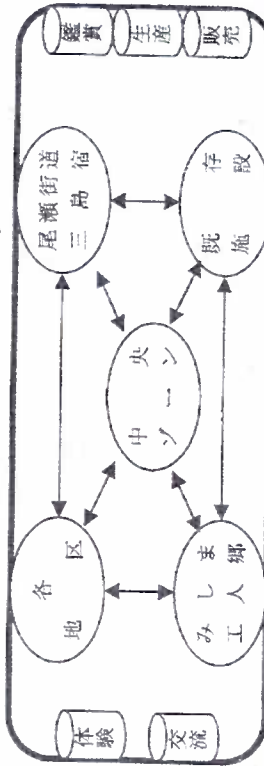


シンボル事業

三島町エコ・ミュージアム構想

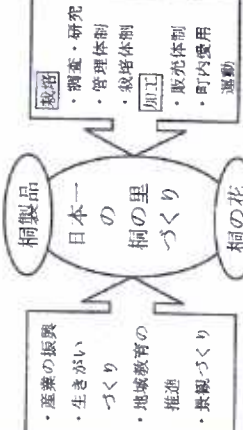
三島町の豊かな自然、地区に伝わる伝統行事の数々、地場産業、そして町民の日々の暮らしなど町全体を「三島町エコ・ミュージアム」とし、交流を町全体で展開する。経済や町民の暮らしの向上を目指し、将来に伝える三島町の顔づくりを長期的視点で取り組んでいく。



重点事業

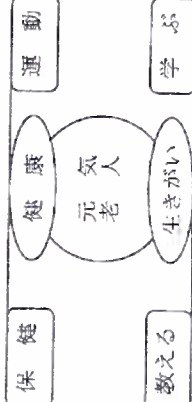
日本一の金波桐の里づくり事業

情報の氾濫が個性化と機並びの時代となり、地域づくりとして町の顔が必要である。そのため、町の財産である「会津桐」の全てに徹底的にこだわっていく。



元気老人活躍ステージづくり事業

町の高齢化率は37%、そのほとんどの方が元気。今後とも元気であるための施策を地域性と結び付ける。また、町民全員の心身の健康を「元気老人」をスローガンに推進していく。



ふるさと運動

都市と山村の交流事業として昭和49年に全国に先駆けてスタート。住む人が自ら地域づくりに取り組み、それに賛同する首領の特別町民とで理想のふるさとづくりを行う。

有機農業運動

山間の小規模農地での農業のあり方として、市場を迫るのではなく家族の健康を基本としていくもの。そして、それについて隣人、交流者に分けていく運動。

生活工芸運動

暮らしの中から生まれた伝統的なものづくりの技と豊かな自然を現代の生活にも生かしていく運動。編み組、各種木工、会津絞桐タンス等が生まれてきた。

地区プライド運動

各集落には伝統行事の数々が今に伝わっている。こうしたものを集落の誇りとして守っていくことで、連帯意識の高揚を図る。

健康づくり運動

豊かな暮らしの基本である健康を守るため、各種事業はもとより、地域づくりと併せて推進していく。

快適な生活環境の創造

- ・中央ゾーンの整備
- ・景観条例の整備
- ・早戸温泉整備
- ・町営住宅の整備
- ・宅地開発
- ・空き家の活用
- ・下水処理施設の整備促進
- ・保健センターの整備

自立できる産業の推進

- ・遊休農地の活用
- ・健康に留意した農業の推進
- ・農産加工の充実
- ・会津桐の振興
- ・百年杉の生産
- ・生花工芸運動の推進
- ・グリーンツーリズムの推進
- ・情報物産館の整備
- ・ふるさと運動の推進

三島人としての人材の育成

- ・保育所の整備
- ・地域学習の推進
- ・生涯学習の推進
- ・地区づくりの推進
- ・伝統行事保存活動の推進
- ・町史編さん

町づくりの基盤整備

- ・自らが考え、自らが行動する
- ・一人ひとりが主役、みんなが主役
- ・三島らしさを大切にする

三島町生活工芸運動のあゆみ

経緯

三島町は福島県の西部に位置し、周囲の町村界とは600mから1,000m級の山に囲まれた山岳地形を形成しています。町の中央には尾瀬沼を水源とする只見川が東西に流れ町を二分しています。

只見川の浸食によって河岸段丘が形成され、只見川とその支流に16の集落と1,994人の人々が生活していますが、現在高齢者人口が県内でも43%と3番目に高く年々増加傾向にあります。

町の面積の86%が林野で耕地は7%しかなく、自給型農業を営む典型的な山村であります。気候は日本海側気候で、積雪は1.5mから3mに及び、12月から4月中旬までが積雪期間となり雪に埋もれた生活を余儀なくされています。このような豪雪、過疎、山村という環境にありながらも先人達は山村の良さを暮らしの中に取り入て生活をしてきました。

四季は明確で肥沃な土壌によって成長した原材料を適期に採取し、農閑期に農具の修理や生活用具の製作を行って来ました。長い冬の生活において必要不可欠なものであり、江戸時代に作られた農業指導教本とも言える「会津農書」（1688年～1711年・佐瀬与次右衛門書）にも冬の生活としてのもの作りが記載されています。このような生活は昭和40年ころまで引き継がれていました。

昭和40年代になると、高度経済成長によって今までの生活が急激に変化して行きました。家計を支える仕事は農林業から建設業や出稼ぎ業へと変わり、自給自足の生活は消費生活へと変わりました。また、若者の都会への流出が活発になり人口減少が急激に進み、町は過疎化の一途を辿ることになりました。こういった生活の変化は人と人、個人と地区との絆を細くするという弊害をもたらしました。家庭で一家団欒の食事は減り、地域内においても隣近所同士の会話も減りました。人口の流出により地区によっては伝統行事を行うにも障害が出るようになりました。

対人関係が希薄したことを懸念した町は、昭和56年に町づくりの施策として5本の柱を提唱しました。その中で「生活工芸運動」は人と人との絆を、「地区プライド運動」は地域内の絆を強めるというものでありました。「地区プライド運動」は各地域の伝統行事や景観地、歴史遺産等を集落の誇りとし、継承していくものであり、地区全員による共同作業や施設清掃・整備によって各町民が一丸となって活動することができるよう・・・と。また、「生活工芸運動」は豊富な自然資源を活用して昔もの作りをした人達の技術を復活させ、家庭内でものづくりを通して家族との会話が増え、更に近所の人達とももの作りを通して会話が生れるように・・・と。

「地元で採れる自然素材を昔から伝わる技術・技法によって真心込めてつくり、現在の暮らしに活かすことにより、豊かな山村の生き方を追求する。」このような精神運動と地場産業としての活性化を図るため、昭和56年3月、第一次振興計画(前期)の重点施策として、「文化の香り高い生活工芸の町づくり」を提唱して生活工芸運動がスタートいたしました。

生活工芸運動はその後、活動拠点となる生活工芸館を昭和61年に建設してデザイナーや指導員を配置し、「楽しみながら心のもの作り」を一層推進しました。生活工芸館建設当時は少数だったもの作り参加者も、少しずつ増加し技術も向上したことから、平成14年に「楽しみながら心のもの作り」に「地場産業としてのもの作り」を加え「三島町生活工芸運動友の会」を結成しました。結成当時会員数127人、現在181人にまで増加しています。平成15年7月には、伝統的工芸品の指定を受ける団体として「奥会津三島編組品振興協議会」（会員数160名）を結成し、同年9月10日に「奥会津編み組細工」として、全国で205番目に伝統的工芸品の指定を受けております。昔のもの作りは「生活のために必要だから」が基本でしたが、現在は「楽しみながら生活のための道具を自由に作る」が基本となっています。作り出される工芸作品は、それぞれに製作者の特徴がでています。製作者の大半は70代の高齢者で農業を主としている人達であり、工芸品の製作活動は、田畑の作業ができない雨天の日や冬場の農閑期となっています。生活工芸運動は高齢者が中心となり、町民一人一人が自ら参加し、取り組んで来た運動です。

具体的な運動の内容

- ◇ 三島町生活工芸館による技術の継承運動、新製品開発、品質維持管理
- ◇ 三島町生活工芸品展の開催
- ◇ 各種イベントの開催
- ◇ 三島町生活工芸運動友の会・奥会津三島編組品振興協議会による工芸の振興
- ◇ みしま工人郷の整備
- ◇ 運動の担い手の育成
- ◇ 町内工人・町内関係者・大学関係・有識者・役場・移住してきた工人(サポート)

◆生活工芸館の設立

整備された経緯

町の重点施策である生活工芸運動は、住民自らの活動を主体に、地域の資源を活用し、伝統工芸の保存・伝承を図り町づくりを振興しようとするものであり、そのための拠点として昭和61年10月に生活工芸館を整備した。

生活工芸館の役割

1. 生活工芸運動の推進

過疎・高齢化が深刻な問題の中、生活工芸館はものづくりの教育の場と位置付け、技術技法の継承と後継者の育成を図り、生活工芸運動の理念である「楽しみとしてのもの作り」と「地場産業としてのもの作り」を官民一体となって推進し地域振興に取り組んでいる。

2. もの作り拠点の基礎固め

経済産業大臣指定伝統的工芸品、奥会津編み組細工の振興（意匠開発・販売促進）
生活工芸に関する技術の保存・継承（体験指導・講習会の実施・記録保存）
教育機関と連携による若年層への理解（小中学校総合学習の取組み）
三島町生活工芸運動友の会・奥会津三島編組品振興協議会の自立支援

◆生活工芸館組織 ※教育委員会管轄

生活工芸館長(兼務)

副館長(兼務)

事務職員(常勤1名)

臨時事務員(常勤1名)

木工指導員(1名・毎週木～日曜日)

編み組指導員(1名・毎月奇数の土曜日3日～4日)

◆三島町生活工芸運動友の会の発足

結成された経緯

従来から活動していた木友会、いとへん会を統合した上で、さらに大きな団体として平成13年3月発足した。ヒロロ部会、山ブドウ部会、マタタビ部会、木工部会、美術工芸部会に分かれ、それぞれの製作に取り組んでいるほか、視察研修や展示会を開催し、工芸振興と会員の親睦を図っている。町主催のイベント等に協力をしている。

活動内容

三島町の工人の数は、現在160人です。その中でも70歳を越えた方が約80%を占めており、高齢者の方々が中心となってももの作りに取り組んでおり、第一線を退いた方がもの作りを始め、第二の人生を楽しんでおります。

また、工人の方々が製作した工芸品は、原則的に町内以外での委託実販売等は、行なっておりません。PRのため年に1、2度は全国で展示会を行ないますが、「町外では売らない」「三島町に人を呼ぶ」ことを第一と考えており、町全体に対して貢献していく趣旨の元で、地場産業の発展を図っております。

会員数 町外会員含む 181人（平成22年6月現在）

◆奥会津三島編組品振興協議会の発足

三島町生活工芸運動友の会を母体として、平成15年7月に奥会津三島編組品振興協議会が結成されました。三島町生活工芸運動友の会が「楽しみと地場産業」としてのもの作りに対し、奥会津三島編組品振興協議会は「地場産業」を目的とする団体であり、会員も町民だけで構成されております。平成15年9月10日に「奥会津編み組細工」として奥会津三島編組品振興協議会が経済産業大臣より伝統的工芸品の指定を受けました。実質の運営は、この二団体が一体となって活動しております。国の指定を受けた工芸品は、山ブドウ細工、マタタビ細工、ヒロロ細工の三点です。

会員数 160人（平成22年6月現在）

◆「奥会津編み組細工」伝統工芸士会の発足

平成18年7月には、「奥会津編み組細工」伝統工芸士会が結成され女性2名、男性4名の伝統工芸士が誕生した。現在5名となりましたが、全国伝統工芸士作品展出展など、後継者の育成と奥会津編み組細工の振興に取り組んでいる。

三島町・奥会津三島編組品協議会主催各種イベント

◆三島町生活工芸品展（次回開催 第30回・23年3月）

経 緯 昭和47年に土産品を開発する目的で第1回観光土産品コンクールとして始まり、昭和56年度からは三島町生活工芸品展と称して平成23年度で第30回を迎える歴史ある展示会である。生活工芸運動の軸といえる展示会であり、地域の資源である伝統的なものづくりの技術を活かして特産品開発をするために、町民に呼びかけるきっかけとなった。特に編み組細工においては、この展示会を通して年々発展を遂げ、生産数の増加が図られてきた。

主 催 三島町

後 援 日本赤十字社福島県支部・福島県老人クラブ連合会・三島町各種団体
福島民報社・福島民友新聞社

出展内容 この展示会では町民の手作りによる作品を募集、展示する。生活工芸運動とともに発展してきた編み組細工が現在では出品の大部分を占め、桐工芸品、裂き織りや刺し子などの作品も出展されている。

出品内容 編み組細工、木工品 等

出 展 者 町民

◆ふるさと会津工人まつり（次回開催 第25回・23年6月第2土・日）

経 緯 昭和62年に第1回を開催して以後、毎年開催している。現在では三島町最大の催し物である。手作りでものづくりをする人を工人と呼び、工人同士の情報交換を図るとともに、「作る手から使う手へ」のテーマのもとに消費者との交流を図るまつりである。県内外の工人の方々との交流と口コミにより応募数が増加し、第1回では十数人だった出店が平成22年度には150店を数えている。三島町の工芸品をはじめ、多種にわたる出店が見られ、近年では県内外から二万人以上の来場者を迎えている。

主 催 三島町

出店内容 編み組細工、木工品、陶器、漆器、染織物、ガラス・金属工芸等

出 店 者 全国でもの作りをしている工人

◆全国編み組工芸品展（次回開催 第10回・23年3月）

経 緯 全国には生活必需品として、日常的に使用されてきた様々な編み組工芸品が存在しますが、化学繊維製品の普及により衰退傾向にあります。これらの編み組工芸品の良さを広く周知し、後継者の発掘と育成によって技術技法の継承と全国各地の編み組工芸の発展を図って行くことを目的に開催している。

主 催 奥会津三島編組品振興協議会

共 催 三島町

後 援 経済産業省・林野庁・福島県・（財）伝統的工芸品産業振興協会・マスコミ各社

出品内容 自然素材を用いた編み組細工

出 品 者 全国の編み組細工をしている工人

◆会津の編み組工芸品展（次回開催 第7回・23年10月）

経 緯 会津地域で高齢者人口が増加する中、恵まれた山林資源を活かしたものの作りを通し後継者の育成と高齢者が楽しみと生きがいのある地域作りを目指し、高齢者による地域の活性化を図ることを目的に開催している。

主 催 奥会津三島編組品振興協議会

共 催 三島町

後 援 福島県会津地方振興局・会津17市町村・福島民報社・福島民友新聞社

出品内容 自然素材を用いた編み組細工、

出 品 者 会津地方17市町村で編み組細工をしている工人

図6-1 道の駅運営スキーム図

